

日本のジャーナリズムにおけるヴェトナム戦争の初期報道 Vietnam War and The Japanese Journalism:1965- 1967

岩間 優希¹
Iwama Yuki

¹ 立命館大学衣笠総合研究機構 Ritsumeikan University Kinugasa Research Organization

要旨・・・本稿は1965年から1975年までの日本におけるヴェトナム戦争報道を研究したものである。そこではこの時代のヴェトナム報道を担った代表的人物として大森実、開高健、岡村昭彦を取りあげている。3人に共通してみられる特性は、ヴェトナム取材を企図した主たる理由として、自らの目でヴェトナム戦争を見ることを挙げている点である。大森と岡村に至っては、それを「日本人の目で見ること」と表現した。それまで世界のニュースを知るのには外国の通信社に頼っていたが、これからは日本人の目でそれを確かめようとしたのである。さらに、後の時期と比べて彼らがこの戦いにおける共産主義者の存在を軽視していないことなど、諸特性が明らかになった。初期に活躍した三者はいずれも、アメリカ大使からの圧力、反戦運動からの離脱、南ヴェトナム入国禁止などの理由により、これ以降ヴェトナム報道の主役からは次第に退いていく。
キーワード マスメディア、ジャーナリズム、ヴェトナム戦争、戦争報道

1. はじめに

日本のヴェトナム戦争報道（以下、ヴェトナム報道）を戦後に考察した研究はほぼ皆無である。これは、ヴェトナム戦争が日本の政治、社会、経済、そしてジャーナリズムに与えた決定的影響力を考えれば驚くべきことである。

日本におけるヴェトナム報道は、少なくとも2つの意味で重要性を持つ。まず、戦争報道の歴史から見れば、それまでのメディアがしばしば戦争の実態を隠蔽・歪曲し、対立の扇動さえ行ってきたのに対し、ヴェトナム戦争では初めて「反戦」という主張が展開され、自国政府の方針に反する意見が大々的に繰り上げられた。アメリカ・ジャーナリズムによるヴェトナム戦争批判が、「共産主義との戦いのために今のやり方ではだめだ」という視点だったのに対し、日本のジャーナリズムが戦争自体を否定していたことはその特徴であった。また、ヴェトナム報道で初めて「民衆」の声に焦点が当てられたことも、戦争報道史上における1つの記念碑的事柄であった。

さらに、日本のメディア史に即して見れば、ヴェトナム戦争は戦後日本人が現地から継続的報道をした初の国際的事件であり、日本政府やGHQから独立したメディアが——完全ではないにせよ——自らの裁量で報道することのできた最初の戦争でもある。日本のジャーナリズムの成長期とヴェトナム戦争の同時代性は、メディアがヴェトナム戦争に重要な役割を果たしただけでなく、ヴェトナム戦争がメディアの成長に重要な役割を果たしたことをも含意している。ジャーナリズムの責務の認識やフォト・ジャーナリズムの市民権獲得など、日本のメディアがヴェトナム戦争によって学んだものは大きい。

こうしたヴェトナム報道の意義にもかかわらず、これまでマス・コミュニケーション研究や歴史研究、その他の学問領域でも、日本のヴェトナム報道について検証されることはなかった。同報道についての語りは、知識人による評論か元サイゴン特派員による回顧録がそのほとんどを占めている。もちろん、評論や回顧録は当時の報道を多角的に照射するのに有益であり、本稿でも事実関係の確認や当時の認識を知るためにそれらの文献に学んでいる。しかしながら、評論や回顧録は執筆者の思想や立場、あるいは記憶に左右されざるを得ず、現在までヴェトナム報道に対する多様な評価を許し続けているのもまた事実である。

本研究は、日本のヴェトナム報道を総体的に考察し、その事実を掘り起こし、日本のジャーナリズム史研究の巨大な空白部分を埋めることを目的としている。それによって、ヴェトナム報道の構造や枠組みについての認識を深め、引いては、今後なされるべき戦争報道の在り方を構想するための一助となることを望んでいる。

2. 研究の方法

本研究では、ヴェトナム報道において活躍した代表的論者のルポルタージュ分析という手法を採用している。また、それに鑑みて、関係者へのインタビュー調査によるオーラル・ヒストリーの採取・活用を重点的に行ってきた。

次に、対象とする期間を本稿では1965年から1967年としている。戦争が本格化した1965年からサイゴンが陥落した1975年までの10年間では、当然ながら戦況も勢力構図大きく変化した。本研究は日本のヴェトナム報道の時期的変化をも分析するため、当該期間を1965～1967年までの「初期」、1968～1972年までの「中期」、そして1973～1975年までの「後期」という3つの時期に区分している。そして、本稿では初期にあたる1965～1967年のヴェトナム報道について分析する。以上の区分は、次の3つの観点に照らして有効なものである。

第1に、実際のヴェトナム戦争の展開と連動している。いうまでもなく報道とは、どのような形になるにせよその時点で生起している事柄について伝えようとするものである。そのため、戦況の推移を基盤とすることは欠かせない。ヴェトナム戦争は、1965年から米軍の介入と北爆によって本格化し、「アメリカのヴェトナム戦争」が開始されたのがこの頃である。そして、1968年1月に南ヴェトナム全土で解放戦線が一斉蜂起すると（テト攻勢）、多大な損失を被ったアメリカは撤退を決意するとともにジョンソン（Lyndon B. Johnson）が次期大統領選への不出馬を表明するのである。これが、1973年の和平協定と米軍完全撤退へとつながっていき、1973年以降はヴェトナム戦争の「ヴェトナム化」が起こる。戦闘はヴェトナム人同士の戦いへと様相を変化させたのだった。

第2に、1968年は世界的な規模での思想転換、左翼運動の高まり、若者のラディカル化などが同時多発的に発生し、先行世代への批判、またある種の世代交代が行われた時期であった。日本でこれは1968年の全共闘の台頭、「エンブラ闘争」などに始まり、1972年の浅間山荘事件、沖縄施政権返還、佐藤首相退陣にて一定の区切りを経る。この1968～1972年とその前後を隔てる社会状況の変化に留意する必要がある。

そして第3に、日本におけるヴェトナム報道の担い手自体が変化していくことである。マスコミ各社のサイゴン特派員の交代のみならず、フリーライターや臨時特派員など、多様な担い手によって行われたヴェトナム報道は、時期によって代表的論者が入れ替わっていった。戦況や各種情勢の変化、そして世代差に応じつつ、各時期のヴェトナム報道の傾向も決して一様ではなかったのである。

本発表は、このうちの初期の代表的論者にあたる、大森実、開高健、岡村昭彦のヴェトナム・ルポをその傾向や背景から考察した。ただし以下では、本稿の性格上、考察の結果を簡潔にまとめており、詳細および具体例について割愛している部分があることを御了承願いたい。

3. 大森実のヴェトナム報道

大森は早くからインドシナでの紛争に目を向け、外国人ジャーナリストの現地ルポを掲載するなどしてヴェトナム戦争への関心を喚起してきた。しかしながら日本人ジャーナリストの目でこの戦争を見極めようとした報道はその時点でほとんどなく、大森は日本人が本格的にヴェトナム戦争を報道する企画として「泥と炎のインドシナ」を構想したのである。同企画は日本のジャーナリズムにおけるヴェトナム報道の先駆けとなり、「なじみにくい国際関係記事に新風を吹き込んで、ベトナム報道の一つのパターン(型)を作りあげた」と評価されたほどであった。社会的な筆致が複雑な戦争をわかりやすく伝え、個人の苦悩や悲哀に焦点を当てた報道で読者の興味を引き付けたのだった。書籍化された『泥と炎のインドシナ』の序文で大森は、「インドシナ情勢は、すでに多くの外人記者の手により、かなり詳しく報道されているが、アジアの運命ともいべき、インドシナの将来を、日本人ジャーナリストの目で、とことんまで見きわめようとした企画は少なかった」と述べている。

大森自身のヴェトナム戦争観は、「代理戦争」という見方から徐々に変化していった。『泥と炎のインドシナ』が刊行された際には、ヴェトナム戦争は民族戦争とイデオロギー戦争の要素が複合した「民族的イデオロギー戦争」だと捉えるようになっていた。さらに、1965年9月に北ヴェトナム入国を果たした後は、イデオロギー的側面からの理解を否定し、純粋に民族主義の戦いとして解釈すべきだと主張するようになるのである。北ヴェトナムでの取材体験は、ヴェトナム人たちが現在の戦いをインドシナ戦争との連続で考えていることを大森に認識させたのだった。ただしそれは、それ以前の報道で歴史的観点が希薄だったことのためでもあり、日本のジャーナリズムによるヴェトナム報道全体に対していえることだった。

北ヴェトナム以前の大森は、基本的には東京でヴェトナム戦争ルポの掲載を決定したり、現地取材を指揮したりしていたのみで、自ら戦場を取材して報道するという立場にはなかった。しかし北ヴェトナムでは大森自身が爆撃下の戦場を体験するこ

となり、第二次大戦中にアメリカから受けた空襲の記憶と北爆とを重ね合わせもした。入国前に最も関心を持っていた食糧事情などは、事前に得ていた知識と自身の戦争体験に照らして、北ベトナムの食糧の豊さに目を瞠らせるものであった。大森のみならず当時の日本人の多くがベトナム戦争と第二次大戦の記憶を重ね合わせたが、自身がアジアの国々に行った加害行為とアメリカとを二重写しにしていた年輩の体験者に対し、学徒動員をギリギリのところであつた大森は、アメリカに攻撃される被害者としての視点の方が強かったといえる。

日本全体の反戦世論が盛り上がを見せ、メディアのベトナム報道もアメリカの政策に批判的なものにならざるを得なかつた中、日米政府にとってマスコミのベトナム報道は好ましからざるものであつた。それは、現地サイゴンでよりもむしろ東京であらさまな形の圧力となり、『南ベトナム海兵大隊戦記』の放送が中止された他、ジャーナリストや文化人の発言に対する政府からの批判がたびたびなされたのだった。そうした圧力の最たるものの1つが、大森に対するライシャワーの名指し批判である。現役の大使が特定の新聞社、そして記者に対して公の場で非難を加えるということは、ワシントンの意向にせよライシャワー個人の対応にせよ、アメリカ側の日本メディアに対するいら立ちの表れであつた。むしろ、日本人の反戦世論はメディアの報道によってのみ形成されたのではなく、第二次大戦後20年の節目に沸き上がった戦争否定の思いが世論と報道との相互作用の中で増幅していったのだと見ることができる。大森は毎日新聞社が毅然とした対応を見せなかつたことを直接の背景に同社を辞し、その後は『中央公論』や『潮』の他、いくつかの週刊誌との契約で情勢分析や現地ルポを発表し、ジャーナリスト活動を続けたのである。

4. 開高健のベトナム報道

南ベトナムへの出発前、開高はインタビューに答えて南ベトナム行きの動機をいくつかの筋道から語っている。まず、「現在ベトコンと呼ばれている民族解放戦線という勢力が、南ベトナムの国家建設をやるわけだ」が、「僕は小説家だから、国家が作られるまでの過程に非常に興味がある。作られてしまったあとの国家については書く人もたくさんいるだろうけれども、僕は今のところ、作られつつある国家について書きたいと思うわけです」。そのために、「いっぺん歴史の転換というものを見てみよう」と考えたのである。また、それらを見ることによって「自分がヤスリにかけられ、試され、言葉を失い、迷い、あるいは希望が出てくるかもしれない。とにかくいっぺんその混沌のなかに、自分をほうり込んでみよう、そうして自分のなかに残ったものから出発して、ひとつ作品を書いてみたいと望ん」だのだった。開高は小説家として自らの行き詰まりをそのようにして打破しようとしたのである。

実際のルポにおいては、できるだけ眼前に見えた事実だけを記そうと努めた。仏僧や南ベトナム兵、米兵をはじめ、山岳民族、日本人技師など、南ベトナムに生きる様々な人とのやりとりをできるだけそのまま書くことを心がけたのである。開高のルポには、接した人物の性格や人間性、言葉などが小説のように書き連ねられている。そのため、戦争自体の構図や背景、全体的な見取り図を提示した上での大枠の議論ではない。全体像の提示をジャーナリズムの責務と考える者や、アメリカ帝国主義による侵略戦争としてベトナム戦争を把握する左翼陣営からは、まさに目の前に見るものしか見えていない狭隘なルポだと批判をされたのである。しかしベトナム戦争の本質や見通しは彼自身で持っていたし、それを前面に出さずに事実のみを記したのは意図的になされたことであつた。このような開高の微視的な視点は、全体像を提示する報道とは別に、そこからこぼれ落ちる諸々の事象を知らせるものとして意義を持っている。

またこれらのことに関連して、今ひとつの開高のベトナム報道の特徴は、戦争というマクロな構図の中に生きる人々を戦わざるを得ない立場に置かれた受け身の存在として捉えていることにある。「アメリカ軍人のヒューマニズムに眼を奪われ、帝国主義の本質を見失っている」という主旨の批判がなされたが、開高にとって米兵は国家によって戦わざるを得ない立場に置かれた苦悩の存在であつた。小田実の言葉を使うならば、彼らは「被害者」であり、そして武器をとってベトナム人を殺す「加害者」でもあつた。戦いを恐れ、「疲れた」といい切る南ベトナム兵たちに対しても同じことである。開高がベトナム戦争を微視的な視点で見るとは、そこで闘う人々を国家と対峙する存在として捉えることにつながっていった。こうした見方は、戦争体験のあるリベラルな知識人にはある程度共通するものであつたが、68年の思想的潮流の中で、開高の主張は統一した民族主義勢力として解放戦線を支持する言説には繋がっていきにくかつた。

開高は、ルポの中で自身の戦争体験を重ね合わせることはほとんどなかつた。むしろ、戦争体験世代の日本人である彼がベトナム戦争を見た様々な局面で第二次大戦の記憶を思い出さなかつたはずはないだろう。しかし、直接的な形で自身の戦争体験を二重写しにするような記述は見られない。開高は個々人の立場を理解することで、いずれかに自身を投影するよりは各々の心情に共感を寄せたのだった。ベトナムに残留した元日本兵らの苦闘に思いを馳せたのもその1つである。ただし、

共感してもし切れない第三者の身分を痛感していたからこそ、『ベトナム戦記』の立ち位置はその不安定さ包含せざるを得なかった。開高の認識は、戦わざるを得ない立場に置かれている当事者を、安全な場所から平和を叫ぶ他者がどこまで尊重するのかといった、重要な問題を突き付けている。後のベ平連との決別は、まさにそうした開高の立場をより決定的にするものであった。

5. 岡村昭彦のヴェトナム報道

岡村は、アジアにネットワークを持っていた PANA 通信社を基盤にしなが、日本人記者として最初に現地から継続的報道を行ったジャーナリストである。岡村の書くルポには、インドシナの戦争を歴史的・同時代的に位置づける巨視的な観点が貫かれており、その中で日本人として為すべき立場が明確に示されている。「日本自身のこととして」という点は重要である。岡村のこれ以降の全報道を通じて、日本と対象を結び付ける視点、あるいは日本人としての立場から対象を見る視点が明確に表れているのである。岡村は日本人としてヴェトナム戦争をはじめとする世界の出来事を見ることを強く意識しているのであった。また、岡村の「日本人として見る」ということの中には、日本がかつて行ったアジア諸国への加害が明確に認識されている。前世代の日本人の戦争責任や平和憲法が存在などその筋道は様々に語られるものの、さらに岡村にとってヴェトナム戦争を報道することは日本人が是非とも行わなければならないことだったのである。そして岡村は、この戦争を過去・現在の日本と繋ぎ合わせるマクロな視点で報道を行った。実際の取材においては、岡村の血縁関係が東南アジアの大使館で受けが良かったことや、サイゴンで元日本兵の協力を得ていたことなど、戦前と戦後の繋がりが岡村の報道をバックアップしたことも見逃せない。

また、日本のメディアで働いた経験なくしてサイゴンに飛び込んだ経緯は、岡村の新しく自由な感性を伸長させた。彼はサイゴンで出会った欧米人記者たちのジャーナリズム精神に感心し、報道の自由について成熟した考えを持っていない日本社会を強く批判したのである。岡村は欧米人の目ではなく日本人自らがヴェトナム戦争を報道することを重視したが、欧米のジャーナリズムそのものを否定したわけではない。むしろそれらに多大な影響を受け、自由なジャーナリズムの権利を守ろうとする欧米社会の姿勢を日本でも実現すべきだと考えたのだった。岡村は決して「反米」というわけではなかった。サイゴンで彼らに学んだジャーナリズム精神を標榜しつつ、それまで彼らが報道していなかったもう一方の事実を明るみにしようと挑戦したのである。

解放戦線の根拠地を取材しようと考えたことはその表れであった。本研究からは、岡村がかなり綿密かつ野心的に解放区の取材を遂行していたことが明らかになった。それまで「北からの浸透」という視点で報道していた欧米メディアの情報が主流だった中、岡村のようにもう一方の側から別の現実を照射することの価値は大きい。しかしだからこそ、新たに報じられたニュースは、それが衝撃的であるほど、それ以前の報道を強く否定する方向へと働きやすいのである。フィン・タン・ファットのような人物との会見記はスクープとして注目されやすく、既存の報道を否定する発言の影響力は大きかったろう。

さらに岡村の報道のスタンスは、ヴェトナム戦争を「民衆」の運動として把握していることである。これには、ゴ・ジン・ジェム時代からの圧制に戦ってきた「民衆」の姿を見てきたことに加え、日本で未解放部落や炭鉱で労働者の運動に深くコミットしてきた経験が背後にあった。岡村の場合、その反戦思想には戦争体験の記憶が反映されているが、ヴェトナム戦争そのものの理解においては日本での社会運動経験が「民衆」の戦いという戦争観を形成させたとみられる。ただし岡村のルポにおいて「民衆」の言葉がそのまま記述されることはなく、書かれているのは「民衆」を代弁する自身の言葉か、あるいは岡村の「民衆」に対する眼差しであった。そして岡村は自身を「民衆を守る」存在だと位置づけていた。

5. おわりに

本研究で得られた知見は以下である。

第一に、第二次大戦中、日本がインドシナに進駐していたことから、そのままヴェトナムに住み着いた元日本兵や、ヴェトナム賠償による工事のために派遣された日本人技術者、あるいは日本語の話せるヴェトナム人といった存在が、日本人ジャーナリストのヴェトナム・ルポに重要な協力者として登場する点である。ジャーナリストたちの多くは彼らを通じてヴェトナムとつながり、ある部分については彼らの目を通して現地を見ていた。

第二に、ヴェトナム戦争後、“日本のヴェトナム報道は南ヴェトナムに北の正規軍が侵入していることを見抜けなかった”とする評価がなされることがあるが、それは必ずしも正当な評価ではない。北の正規軍が南で戦っていることは終始報道されていたのであり、それどころか、そもそもはそうしたアメリカ政府側からの視点での報道が大半を占めていた。

第三に、日本人ジャーナリストたちはヴェトナムを取材しようと思った動機として、そのようなアメリカ側からのヴェトナム報道が主流だった中で、「自分たちの目でこの戦争を見よう」と考えたことを挙げている。岡村、大森などにおいては、それは「日本人の目で見ると」といふこととほぼ同義であった。そうした考え方は一つに、対立する二者のうちアメリカ側の見方ばかりが報道されている中、もう一方の解放戦線側や、北ヴェトナム側から見た視点を報道しなければならないという、ジャーナリズムの原則として至極まっとうな志向性となって表れた。

そして第四に、とはいえ、この時代にヴェトナム戦争を「自分たちの目で見ると」といふことは、第二次大戦の記憶とヴェトナム戦争とが密接にリンクしないわけにはいかなかった。彼らはアメリカ軍の戦闘機に爆撃された幼少期の思い出とヴェトナム人の姿とを重ね合わせもすれば、アジアの人々を苦しみに追いやった自分たちの父や兄たちとヴェトナム戦争でのアメリカ兵を重ね合わせたりもした。

第五に、しかし以上のようなジャーナリストの報道からは、「反米」という態度を見出すことは難しい。アメリカ政府のヴェトナム政策は批判され、またアメリカ側一辺倒でヴェトナム戦争を見ることこそ危惧されたものの、ワシントン特派員として良き時代を送った大森や、ヴェトナムで欧米のジャーナリストを「兄貴」と慕った岡村などに、「反米」という感情はない。開高も、「国家」という存在に押しつぶされそうになる米兵の悲哀をルポの中で書いている。

この他、1960年代の週刊誌・新書判ブームや、ジャーナリズムにおけるニュース解説機能の再注目などといった特性が日本のヴェトナム報道の形態を規定していた点や、初期のヴェトナム報道が中期以降に比して、「民衆」に焦点を当てることが少なかった点などが、研究の中で浮かび上がってきた。

最後に、今後の課題について述べておく。初期のヴェトナム報道では、アメリカ側からのニュースに対して、日本人としてのヴェトナム報道を行うというナショナリスティックな側面があった。しかし、中期以降にヴェトナムを取材したジャーナリストになると、それまでの日本人の報道をある程度参照しながら、自らのヴェトナム戦争観を確立させているはずである。このとき、初期のジャーナリストとそれ以降のジャーナリストとでは、戦争に対する認識の仕方や構造、規定要因などに決定的な違いがあることになる。今後は中期、後期にそれぞれ活躍したジャーナリストに焦点を当てながら、ヴェトナム報道の時期的変化なども含め総合的に検証していく。

参考文献

- 饗庭孝典他 2004 「君はベトナム報道を覚えているか検証1 座談会 今、ベトナム戦争報道から学ぶもの」 『放送研究と調査』 54 (8)、日本放送出版協会
- 荒瀬豊、稲葉三千男 1966 「ヴェトナム戦争と日本のマスコミ—質と量にみるその変化の過程」 『世界』 (249)、岩波書店
- Gaiduk, Ilya V. *The Soviet Union and the Vietnam War*; I.R. Dee, 1996
- Hallin, Daniel C. *The uncensored war*; University of California Press, 1986
- Hammond, William M. *Reporting Vietnam: media and military at war*; University Press of Kansas, 1998
- Herring, George C. *America's Longest War: The United States and Vietnam 1950-1975*; Wiley, 1979
- 日野啓三 1966 『ベトナム報道』 現代ジャーナリズム出版会
- 古田元夫 1990 「ベトナム戦争と中ソ対立—63年～65年のベトナム労働党の政策展開と中国・ソ連」 『国際政治』 (95)、日本国際政治学会
- 1991 『歴史としてのベトナム戦争』 大月書店
- 入江通雅 1978 『戦後日本外交史』 嵯峨野書院
- 岩間優希 2008 『文献目録 ベトナム戦争と日本』 人間社
- 2010 「他者の戦争を見ることについて—開高健のヴェトナム戦争報道」 安部彰、堀田義太郎編 『生存学研究センター報告 11 ケアと／の倫理』 立命館大学生存学研究センター
- Joe, Anthony J. *The War for South Vietnam, 1954-1975*; Praeger, 2001
- 開高健 1965 (1990) 『ベトナム戦記』 朝日新聞社
- 1965 「日の丸かついで戦火のなかへ」 『文藝』 4 (2)、河出書房新社
- 1965 「サイゴンから帰ってベトナムは日本に期待する」 『週刊朝日』 (3月12日号)、朝日新聞社
- 1965 「開高健氏インタビュー メコンの泥は底知れず深い」 『日本読書新聞』 (3月22日)、日本出版協会
- 1965 「東京からの忠告—わが「ベ平連」アピールに力を」 『朝日ジャーナル』 7 (39)、朝日新聞社
- 1986 (1989) 『夜と陽炎 耳の物語 2』 新潮社文庫
- Karnow, Stanley *Vietnam: A History*; Viking, 1983

- 近藤紘一 1976 「「解放」の論理と現実」『革新』(66)、民社党本部教宣局
- Kuter, Stanley Led *Encyclopedia of the Vietnam War*, Scribner Book Company, 1996
- 大森実 1965b 『北ベトナム報告』毎日新聞社
- 1971 『石に書く——ライシャワー事件の真相』潮出版社
- 大森実監修 1965 『泥と炎のインドシナ』毎日新聞社
- 岡村昭彦 1965 『南ヴェトナム戦争従軍記』岩波新書
- 1966 『続南ヴェトナム戦争従軍記』岩波新書
- 1975 『兄貴として伝えたいこと——岡村昭彦証言集』PHP 研究所
- Prados, John *Vietnam: The History of an Unwinnable War, 1945-1975*, University of Kansas, 2009
- 佐々木久雄 1965 「ベトナム海兵大隊戦記取材記その一」『テレビドラマ』(8)、ソノレコード
- Turley, William S. *Second Indochina War*, Mentor, 1986
- Young, Marilyn *The Vietnam Wars, 1945-1990*, HarperCollins, 1991